

「ヨセフの夢」

2021年05月20日

ヨセフは彼らにこう言った。「聞いてください。私はこんな夢を見ました。私たちが畑の中で麦の束を結わえていると、いきなり私の束が起き上がり、まっすぐに立ったのです。すると、兄さんたちの束が周りに集まり、私の束にひれ伏しました。」兄弟たちはヨセフに言った。「お前が我々を治めると言うのか。お前が我々を支配すると言うのか。」彼らはその夢の話のゆえに、ヨセフを以前にも増して憎むようになった。(創世記 37 章 6 節～8 節)

ヤコブ一家は、父イサクが身を寄せていたカナンのに住んでいた。羊や牛などを飼い、農作物も栽培していた。ヨセフは、ヤコブの一人娘ディナを加えると、12番目の子どもになる。彼は17歳の青年期を迎え、父の側女ビルハとジルバの息子たちと一緒に暮らしていた。兄弟たちは、色々な悪さをしていた。正妻の子どもと側女の子どもたちの間で、扱いが違って、露骨な差別があっただろう。彼らの不満が悪さを産んでいたことは容易に想像できる。ヨセフは、その兄弟たちの悪い噂を父ヤコブに話した、言わば、告げ口したのである。狼に襲われたと偽り、羊を食べたりしたのではないか。彼は、兄弟たちの偽りや悪を許せないと、父に告げ口する、良く言えば、正義感の強い良い子であった。しかしこのことが、兄弟たちのヨセフへの憎しみをかき立てた。ヨセフは、愛妻ラケルが年を取ってようやく生まれた子どもであったので、ヤコブはどの子どもよりも可愛がった。彼には、仕事着ではない長袖の上着を作ってやるほど、特別な子どもとして扱った。ヤコブは自分の感情を、そのまま表わす父親であったようだ。父の溺愛を受けるヨセフを、兄弟たちは一層憎み、穏やかに話すことができないほどになっていた。兄弟たちの間で、ヨセフは一人浮いた存在になっていた。

ある時、ヨセフは夢を見た。その夢を兄弟たちに話した。「聞いてください。私はこんな夢を見ました。私たちが畑の中で麦の束を結わえていると、いきなり私の束が起き上がり、まっすぐに立ったのです。すると、兄さんたちの束が周りに集まり、私の束にひれ伏しました。」彼は兄弟たちに臆面もなく、あなたがたは私にひれ伏すと言った訳である。父から溺愛され、自分たちのことを父に告げ口するヨセフは憎い。しかも下から二番目の幼い弟が兄弟たちの上に立って治めると言う。兄弟たちは、怒りを込め、「お前が我々を治めると言うのか。お前が我々を支配すると言うのか」と言った。そして彼らは、夢の話を聞いて、以前にも増して憎むようになった。当然であろう。彼はいわゆる「空気の読めない」人で、自分のことしか見えない、極楽とんぼであった。両親から受けた愛が、このようなヨセフの人格形成をもたらしたのでないか。

ヨセフはまた、別の夢を見て、それについても兄弟たちに、「私はまた夢を見ました。すると、日と月と十一の星が私にひれ伏していたのです」と、兄弟たちの反感を全く意識していないように話した。太陽は父親、月は母親である。母ラケルはもう亡くなっていたので、兄たちの母親レアを指す。11の星は11人の兄弟たちである。11人の兄弟は、一人娘ディナを除き、ヨセフの弟ベニヤミンを含めた男兄弟11人である。要するに、家族が皆、ヨセフにひれ伏すと話した訳である。この夢を兄弟たちに話しているのを父は聞いて、さすがに、「お前が見たその夢は一体何なのだ。私やお母さん、兄弟たちがお前にひれ伏すでもいうのか」と咎めた。兄弟たちはヨセフを妬んだが、父ヤコブはヨセフの夢を心に留めた。この夢が、神がヨセフに託した人生であった。